

福島ヘリテージマネージャー今年度第7回育成講習が13日、福島市の県建設センターで開かれた。今回は特別講演会として一般公開され建築士、行政など約80人が聴講した。

テーマは「古民家の再生と活用」。安藤邦廣筑波大学名誉教授が「民家の特性と未来に生きる改修とは」と題して、民家を構成する資材・資源とそれを生かす職人の技を中心に講演した。

民家を活用すること、その資材・材料が採



(上から) 行政、関係団体などが聴講した講習会。安藤教授、竹原氏

れる里山を考えることに つながるため、両者がかみ合うことで地域の暮らしを伝えることにつながると話し、筑波山での活動事例を基に話した。

かつて建材はもとより 枝葉は燃料、落ち葉が肥料、松脂、地下水の涵養など、石炭や石油エネルギーの使用前は農家の生業と暮らしを支えてきた

日本では生活に密着した木材であり、梁に使用すれば1000〜2000年持つため古民家として重要な要素となる。

また、カヤの調達も深刻な問題となっている。民家の暮らしを伝えるには必要で、景観を残すだけにはとどまらない。カヤッコシは環境保全に重要な役割を果たしてお

プホームなど古民家活用事例も示した。

また、今年6月に「じまりの美術館」としてリニューアルオープンした猪苗代町の十八間蔵

で、設計に携わった建築家の竹原義三氏(無有建築工房主宰)が「再生の手法」について話した。竹原氏は、25年まで母校の大阪市立大学大学院

古民家活用は里山再生から

安藤、竹原氏招き特別講演

福島ヘリテージマネージャー育成講習

松林が、関東では少なく用があるという。つてきて、30年ごとの共同作業と里山を基盤とした暮らしを取り戻すことが必要とした。結婚式やコンサート、グループ

生活科学科教授を務めており、大阪の賃貸長屋再生を通して、学生に日本建築を学ばせた。増築部分を外し元々の建築物に減築することから始まり、耐震性を持たせるため木製フレームを充て限界耐力計算による



構造計算を行う。学生たちはこの改修過程で、表具やふすまの張替までも覚えていき、さらに「住まい方」の工夫も編み出すという。

日本財団のオール・プロジェクト支援事業の一環で、知的障がい者が制作した芸術作品を展示する美術館建設にも関わっており、鞆の浦や猪苗代でのプロジェクトも紹介した。

古い街並みや伝統的な建物を生かし、美術館に改修しており、近江八幡や高知など全国で10カ所程度に整備している。その一つが猪苗代の十八間蔵を改修整備した「はじまりの美術館」。この再生は地元の大工の技術によるところが大きかったという。「建築家が何かを考えるのではなく、地元でこれまでやってきた人々の話を聞きながら、それらをうまく使わせてもらうことだ」と話した。NPO日本民家再生協会の宗像智加枝氏も「古民家の修復・再生・活用の事例」として有形登録文化財指定の蔵や移築例などを説明した。